
壊れた世界と癒し唄

タカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

壊れた世界と癒し唄

【Nコード】

N0135W

【作者名】

タカ

【あらすじ】

電脳世界。無限に存在するその世界の一つが、ウィルスの侵入によって破壊された。周囲の仲間達プログラムが消失していった中、消滅を免れた『歌姫』たちは世界を取り戻す為に戦うことを決意する。

……このような作者の妄想で綴られる、ボーカロイド達を主役にした小説です。

仮タイトルなので、題名は後で変わるかもしれません。

またこの小説では、ボーカロイド楽曲・歌詞を元にした能力やら設

定が登場します。予めご了承下さい。

プロローグ（前書き）

一応、プロローグ。

途中で何を言いたいのかわく分からなくなりました。

プロローグ

暗雲で覆われた空に、歌声が響き渡る。

全ての活動を止めた都市。全ての生が消えた廃都の中心で、一人の少女が歌い続けていた。

少女は歌いながら、少し前までその都市にいた仲間達のことを思い浮かべる。

自分が管理しているという神社やその周りに住む妖怪達について、楽しそうに話していた巫女の少女。いつか同じステージで一緒に歌おうと笑い合ったアイドルの候補生達。他にも数え切れないほどにいる、棲む《世界》は違えど、同じ時間と空間を共にした仲間達。少女は知っている。巫女の少女もアイドル候補生達も、そして少女自身も、無限に取り替えの利く存在の一つでしかないことを。自分がいるこの世界が、本当の意味での世界ではないということ。それでも少女は、歌い続ける。彼等の為の鎮魂歌^{レクイエム}を歌い続ける。この世界にいた全ての命の為に、世界の”サイハテ”まで届くようにと。

やがて少女は、歌うことを止めた。

そして呟く。

「行こう」

その言葉は誰に対するものでもなく、少女自身に向けられたものだった。

彼女達の楽園はすでに壊された。

だから、彼女自身の手で取り戻すのだ。

少女は歩き出す。

同じ《世界》に存在する、本当の意味での『仲間』の元へ。

1章ー1 蒼い鳥と片割れ木枯（前書き）

第1章の1ルート。

実質ここもプロローグみたいなものです。

『こがらし』が一文字に変換できない……（泣）

1章 1 蒼い鳥と片割れ木枯

「馬鹿っていう病気は、いつどんな状況でも治らないものなのかしら？」

あくまでにこやかに、女性は口を開いた。

年齢は20代の半ばほど。茶色の髪の毛に上下ともに赤い服。胸のすぐ下までの短いジャケットと同じく短いスカートが、大人の女性の身体を強調していた。

前述した通り、女性は笑顔を浮かべている。ただしその目は全く笑っていない。

その冷たい視線は、女性によって正座をさせられている目の前の青年に向けられていた。

女性と同年代に見える青年は青い髪に青いマフラー、加えてロングコートという出で立ちだった。季節の変化がないこの世界で、青年のスタイルが変わることはない。

青年も同じく笑顔。しかしこちらは、誰が見ても分かるほどにひきつっていた。

「め、めーちゃん……」

膝にかかる重圧に耐え兼ねた青年が、恐る恐る手を挙げる。

「膝の上にある物を退けてもらえると、僕はすごく助かるんだけど……」

「ええ、すぐにでも退けてあげるわ。私の質問に答えてくれたらね」
笑顔を崩さない女性の言葉に、青年の頬がさらにひきつった。

「い、いや、あのね、僕はただ他のみんながいなかどうかを確かめようとしただけで……」

その言葉を聞いた女性は、青年が挙げた右手をしっかりと掴む。

そのまま、一切の容赦無くその手を捻り上げた。

「あだだだだだだ！」

青年が悲鳴を上げた。180度以上振られた腕がミシミシと嫌な音

を立てている。

痛みにもがく青年を無視して、作り笑いを消した女性——メイコが怒鳴る。

「じゃあどうして真っ先に隠しフォルダに入ろうとしたのよ、このバカイト！」

怒鳴っている最中でも青年の腕はぐいぐいと振られていく。その剣幕と腕の痛みに苦しみながらも、青年——カイトは必死に弁明しようとした。

「ほ、ほらっ、そっちのほう気付かれにくいから、みんな隠れてるとしたらそっちだと思あぎゃあっ!？」

「ええ確かにあるわね、人には見せられないようなあの子達のちょっとしたアレな画像が！」

ただしそれらのデータは既に破損し、断片しか残っていなかったのだが、だからといってカイトの罪が軽くなるわけではない。メイコはそれから5分ほどカイトを拘束し続け、腕が360度回転したところでようやく手を離れた。

「まったく……。ふざけるのもいい加減にして頂戴」

そう言いながら、メイコはカイトの膝の瓦礫をどける。

「こんな大変な時ぐらい、しっかりしてる所を見せてよね」

そしてカイトに左手を差し出す。

「ああ、分かったよ」

カイトはやや苦笑しながらその手を取った。

電脳世界。

メイコやカイト達が生活しているこの世界は、既に『死んで』いた。現実の世界時刻にしてたった2日前の出来事だ。データに寄生して侵入してきた未知のコンピュータウイルスによって、この世界は住人^{プログラム}もろとも破壊された。

その光景はまさに地獄と言っているいいものだった。セキュリティによる防衛すらものともせず、いや、そのセキュリティすらもそのウイ

ルスによつて喰らい尽くされていったのだ。

そんな中メイコ達はなんとか自分達に向かつてきたウィルスを撃退し、他の生存者を捜して移動していたのである。

「じゃ、もう行きましょ。早くみんなを見つけてあげないと」

明るい声で言い、メイコは歩き出そうとした。

だが、再び足を止める。

「……みんなは、本当に無事なのかな」

立ち上がったまま動こうとせずに、カイトはぽつりと呟いた。

「2日近くも動き回って、まだ誰にも会ってないんだよ。みんなだけじゃなく、それ以外の人達とも。これじゃあ、もしかするとみんなも……」

カイトはやや目を伏せながら、自分の中にある『最悪の可能性』を呟いていく。

それを聞きながらメイコは思う。

本当に馬鹿だな、と。

なぜこの男はこんなに弱気になってしまふのだろう。なぜそんな悪い予想ばかり考えてしまふのだろう。

可能性とは、自分で創るものなのに。

それができるだけの力を、カイトを含めた自分達は持っているというのに。

メイコは無言のままカイトに歩み寄り、その顔を両手で掴み無理矢理自分のほうへ向けた。

その目を正面から見据える。

「めーちゃん……?」

「あのねカイト、まだ何も終わってないのよ」

見据えて、言葉を紡ぐ。

「世界は壊れたけど、失くなったわけじゃない。私達は世界を隅から隅まで捜したわけじゃない。あの子達も動き回って、私達と入れ違いになってるだけかもしれない」

そこでメイコは一呼吸置く。

「……もつと、みんなを信じてあげてもいいじゃない」

そこでメイコは一呼吸置く。

「……もつと信用していいじゃない。みんななら大丈夫って、信じてあげていいじゃない」

最後にそう言った。

そして、その言葉はカイトに伝わった。

「……信じる、か。うん、そうだね」

カイトは眩き、笑顔を浮かべる。

「それじゃあ、僕達も行かなきゃね。みんなの事を信じて」

「ええ」

カイトとメイコは笑顔を交わし、今度こそ二人揃って歩き出す。

そして、二人同時に異変に気付いた。

「……ん？」

地面が小刻みに揺れている。

地震ではない。振動はある程度の間隔を持って不規則に起こっている。よく耳を澄ますと、振動に合わせてかすかに音が聞こえた。

何か大きな物を、地面に叩き付けるような音。

「……ウィルス、かな」

「どうかしら。ウィルスが暴れてる音には聞こえないけど……」

だが現状を考えるとその可能性が一番高い。二人はとりあえずそう見当付けた。

「……嫌な予感がする」

カイトが言った。

ウィルスが暴れている。

それはつまり、破壊する対象がいるという事だ。誰かが、ウィルスに襲われているかもしれない。

「ごめんーちゃん、先に行くよ」

「え？ ちょっ……」

言うが早いのか、カイトは走り出す。

走りながら、その身体に変化が起こった。

背中が弾ける。コートの背中が内側から破られ、その中から蒼い翼が現れた。

カイトはその翼を羽ばたかせ、振動の元へ一直線に飛んでいく。

後に取り残されるメイコ。

「うわー、ずっるー……」

どうせなら直接運んでくれればいいのに。そう呟きながらメイコも同じように駆け出した。

その身体に亀裂が走る。

亀裂に沿って、メイコの身体が分かれていく。その断片はさらに薄く剥がれ落ちていき……やがて、メイコの体は無数の木の葉へと完全に変わっていた。

そのまま、飛び去ったカイトが起こした風に乗る。

震源は近くないが、そう遠くもないだろう。そう考えながら、無数の木の葉となったメイコは宙を滑っていった。

1章ー2 悪の王女は車上に笑う（前書き）

前の時間帯の別サイド。

遅れに遅れました、申し訳ありません。

サブタイトルが本編の内容にほとんど関わってなかったり。

1章 2 悪の王女は車上に笑う

少し時間を遡る。

カイトがメイコから折檻を受けていた頃、それなりに離れた場所でも何とも言えない疲労感に包まれている2人がいた。

一人は十代半ばほどの、黄色い髪少年。黄色のセーラー服のようなシャツに黒のハーフパンツ、首元には黄色のネクタイを巻き、黒いルーズソックスと一体になったような靴を履いている。利発そうな顔立ちの少年だが、現在その顔には疲労と呆れが同じ割合で張り付いていた。

もう一人は大人の女性である。ピンク色のロングヘアーに白い肌。黄のラインで縁取られた上着に長いスリットが入ったスカートと、全体的に黒が基調になっている。メイコと同様の女性らしい身体のラインだったが、また違ったミステリアスな魅力を放っていた。顔にはやはり少年と同じ感情が表れている。

そして二人の間では、一人の少女が壊れかけた椅子に腰掛けていた。金色のドレスに身を包んだ、少年と同年代と思われる少女だ。同じく黄色の髪が頭の後ろで結われ、その目は不機嫌そうに他の二人を見上げている。姿勢などには年齢よりも幼さを残しているが、同時にそこはかとなく気品を纏っていた。

この少女が二人の表情の原因である。

「……リン」

少年が深いため息と共に、目の前の少女に話を切り出す。

「とりあえず、元の姿に戻ろうか。話はそれからしよう」

「ダメ」

即答。半ば予想していた返事だったが、頬がひくつくのは止められない。

「……えーと、だから」

「ヤダ」

今度は更に速かった。少年は台詞を言い終わってすら……というか、まだ何も言っていない。

少年は軽く首を振り、深い深いため息を吐き出した。

「……リン。いい加減にしないと怒るよ？」

「ええー」

リンと呼ばれた少女が不満げに口を尖らせる。

オリジナル

「だって原型の姿だと二人とも言うこときいてくれないじゃん。私この『リリアンヌ』の姿のほうがいいもん」

身勝手な事を平気で言っているリン（リリアンヌ）に少年は頭を抱えた。代わって女性が口を開いた。

「リンちゃんが無茶な要求ばかり出すからでしょう？ 普通のお願

いならちゃんと聞いてあげるから」

「えー、無茶じゃないもん」

「この状況で馬車と3時のおやつを要求して、どこが無茶じゃないって言うの？」

「当然じゃない。私は王女様なんだからね」

小さな胸を張ってみせるるリンに、女性——ルカは思わずこめかみを押さえた。少年に小声で話しかける。

「……レン君。あなたの姉弟、何とかして頂戴」

「とっくにしてるよ、何とかできるのならね」

ルカの言葉に、レンはそう答えるのが精一杯だった。

鏡音リンと鏡音レン、そして巡音ルカ。

ボーカロイド

メイコやカイト達を含む彼等は、”VOCALOID”というソフトウェアである。

本来彼等は歌を歌う為だけの存在だった。実際、彼等の仲間の”ある少女”が造られるまで、以前からいたメイコとカイトの仕事や”設定”はごく限られていた。

しかし、その少女が登場してから状況が一変する。

”彼女”が公開されて間もなくに脚光を浴びると、彼等ボーカロイドそのものに対して注目が集まった。キャラクターとしての設定に加えて、創作に伴った膨大な『設定』が彼等に与えられていくことになる。

そして、どのような経緯で作られたものだろうと設定はあくまで設定であり、彼等はその設定を”能力”として自在に使うことができた。

カイトやメイコが移動に使っていたのもそれらの一つであり、彼等がウィルスに立ち向かえたのも『ボーカロイドはウィルスに対抗する存在だ』という設定が実際に存在する為である。

リンの現在の姿もそれらの一つだった。この『悪ノ娘・リリアンヌ』は、リンが持つ設定の中でも特に強力な力を持っているものだ。

……なのだが、その反動というべきか、その姿になると性格が超がつくほど傲慢で我が儘なものに変わってしまい……先程からリンはその副作用を利用して様々な『わがまま勅命』を下していたのである。

「ちよっとー、何こそそしてんのよ？」

顔を寄せてなにやらひそひそと話しているレンとルカに、リンが不愉快そうな声を上げた。

「いや、なんでもないわ」

ルカが即座に答えた。同時に目でレンに「どうする？」と問いかける。

ルカの視線を受けてレンはもう一度説得を試みようとした。

「とにかく、いい加減元の姿に戻って。じゃないとオレも本当に怒るよ」

「いいもん。レンに怒られたって怖くもなんともないもん」

リンが平気な顔で言う。

これにはレンも軽く怒りを覚えた。本気で怒るつもりは無かったのだが、今の言葉はさすがに腹に据えかねたらしい。

「それじゃあ、他の人に怒って貰おうか？」

意地の悪い笑みを口元に浮かべて言った。

「ふん、好きにすればいいじゃないの」

リンは平気でそう答える。

しかし、彼女の余裕は次の言葉で消え去った。

「なら、ジェルメイヌさんでも捜してこようかな」

リンが息を詰まらせた。その反応に対してやや満足げにリンは続ける。

「そうだよねえ。リンがその姿でいるなら、やっぱり設定に合わせた役割にしないと」

レンが言葉が続ける。

「自業自得っていうのかな？ 本来の物語もその通りだし、それもこれも全部リンの……」

「レン君」

咎めるようなルカの呼びかけでレンは我に返った。そして同時に気付く。

リンが身体を抱くようにして震えていた。顔からは血の気が失せ、かちかちと歯を鳴らしている。

やり過ぎた。その様子にレンは思わず歯を噛み締めた。

『赤の剣士ジェルメイヌ』はメイコの設定であり、リリアンヌと共に生まれたものだ。リリアンヌの天敵であり、最大のトラウマと言っている。

もちろん普段のリンとメイコは至って良い関係だが、この姿のリンにとっては恐怖でしかないのだろう。

「……ごめん」

レンは目線をリンと合わせやり過ぎとその手を取った。

「本当にごめん。全部オレが悪かったよ。……でも、そんなに怯えなくても大丈夫だよ」

ルカが見守る中で静かに語りかける。

「リンはオレが絶対守るよ。だからそんなに震えないで」

「……バカ」

リンが湿った声でつぶやく。

だが、先程までの体の震えは止まっていた。

それを見たルカが安心したように息を吐いた。

「分かりましたー、元に戻りますよーっと」

ルカの様子には気付かず、目元をこすりながらリンが拗ねたように言い、椅子から腰を上げる。

同時に、リンの身体が光に包まれ……立ち上がった時には、リンの姿は本来のものに戻っていた。

細かい差はあるものの、その服装はレンのそれとほとんど変わらない。明確な違いといえば、ネクタイが黄色いスカーフに変わっているのと、頭の上に載せられた白い大きなリボンくらいだった。

「はい、これでいいでしょ」

「うん、ありがと」

「礼はいらないって」

リンが気まずそうに顔をそむける。元に戻ったため自己嫌悪を感じているらしい。

「そんなことより。これからどうしよっか？」

話を逸らすように言った言葉だったが、レンとルカは困ったような表情で首を振るだけだった。

三人の経緯はメイコ達と変わらない。同じく現れたウィルスを倒して――正確にはリンがまとめて轢殺^{れきころ}し、その後は各地を転々としていた。その途中で限界に達したストレスが先程の我が儘三昧の理由なのだった。

そのストレスには当然、他の仲間が見つからない不安も含まれていた。

今三人は半壊した家の前にいた。リンが座っていた椅子はその中から出てきたものだ。

「とにかく他のみんなを見つけないな。ネル姉えとかハク姉えが心配だし、カイト兄いがないと使えない設定もあるから。……正直使いたくないけど」

「他の誰かと一緒はらあの二人も大丈夫でしょうけど……。そういえば、私のペットたこルカも捜さないといけないわね……」

「あー……。とりあえず、またあちこち動く？」

「それがいいかしらね。……。リンちゃん、大丈夫ね？」

「うん、多分。……。ごめんねルカ姉え」

「いいのよ。……。レン君？」

ルカはふと隣のレンを見た。途中から会話に加わらず、ただ遠くの一点を見続けている。

「……。振動……。？」

「レン？」

「……。ちよっと待って。今、正確な位置を調べる」

レンがどこからともなく外套を取り出し、素早く羽織った。そして静かに地面に手を置く。

「……。方角は西北西……。距離はおよそ1500メートル」

地面を通して、目的のものを感じ取っていく。

そこまで眩くと、レンは立ち上がって二人に告げた。

「今言った場所で、何か巨大なものが暴れてる」

「巨大なものって……。？」

「誰かがいるのかも！？」

首を傾げるルカと身を乗り出すリン。

「そうかも知れないね。さすがに判らなかったけど」

外套を脱ぎながら答える。その外套は、脱ぎ終わると宙に溶けるように消えた。

それを聞いたリンは途端に元気になる。

「そっかあ……。それじゃあすぐに向かわなきゃいけないよね、うん」

「あの、リンちゃん……。？」

「まさか……。？」

異様なほど元気になったリンの様子に、ルカは少なからず不安を覚える。レンのほうは何かに気付いたようだ。

しかしリンは気にも留めず、なにやら唸るような声を漏らしていたかと思うと、

「……ロードローラーッ!!」

「なっ!?!」

思いきり叫び放った。

同時に、虚空から黄色い重機が現れる。前後に凶悪な鋼鉄のローラーを備えたそれは、威風堂々とした雰囲気すら放っていた。

「なんだか、こうなる予感はいったんだよね……」

レンが何かを諦めたようなため息を漏らす。

だがルカにとって、この展開は全くの不意打ちだった。

「え、何? ここでロードローラーって、まさかこれに乗って行く気!?!」

「大丈夫だよー、時速150キロまで出せるようになってるからすぐに着くから」

「いやそういうことじゃなくて……」

ロードローラーで時速150キロ出すことのほうが問題だ。というか、そんな速度を出していたら地面など均せないのでは?

そんな考えを巡らせるルカを置いて、リンが運転席に飛び乗った。

「あーもう、結局我が儘なんだから……」

ぶつぶつ呟きながらレンも助手席に上る。

「ち、ちょっと待ってよ二人とも!」

ルカも慌てて座席に座ろうとしたが、そこで気付く。

(このロードローラー、座席が二人分しか……)

「って、そんな!?!」

思わず悲鳴を上げていた。レンを膝の上に座らせればと思ったが、そう考えた時には既にリンがエンジンを起動していた。

激しい振動に襲われ、ルカは必死で座席の後ろにしがみつく。

「鏡音リン、ロードローラー、いっきまーす!」

リンがこの上なく純粋な笑顔で言う。

瞬間、ロケットのような勢いでロードローラーが発進した。一気に

最高速度まで加速する。

「う、嘘でしょおお……」

ルカの悲鳴を置き去りにしながら、砂煙と排気ガスを残してロードローラーは走り去っていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0135w/>

壊れた世界と癒し唄

2011年10月9日13時57分発行